

鶴見俊輔「旧蔵書」にみる思想形成の基盤

明星大学 寺田征也

1. 本報告の課題

本報告は、鶴見俊輔の「旧蔵書」を対象とし、その検討を通じて鶴見俊輔の思想形成の基盤の一端を明らかにすることを目的とする。

「旧蔵書」とは、鶴見俊輔がアメリカ留学時代に所有していた書籍のことを指す。鶴見は1942年にアナキストの容疑でFBIによって逮捕されるが、その際に接収された書籍が戦後になってハーバード大学の図書館に持ち込まれた。2005年にハーバード・イェンチン図書館の司書マクヴェイ山田久仁子氏により発見され（マクヴェイ 2011: 29）、現在までに44冊が確認されている。それらは私有物であったことから、鶴見によるメモや下線、入手日や読了日などが書き込まれており、学生時代の鶴見の考えや関心をうかがい知ることができる。

留学時代の鶴見については、自身による著述や発言のほか例えばL.オルソン（1992=1997）による下宿先であったヤング家の夫人への聞き取りなどによる研究があるが、それ以外には検討されてきていない。そのため「旧蔵書」は鶴見俊輔研究にとって、最初期鶴見の思想基盤を知る上で非常に重要な資料であるが、他方、この資料の存在自体があまり知られていない。そこで本報告は、第一に「旧蔵書」の存在をその概要とともに広く知らせることを目的とする。加えて、第二に、資料の検討を通じて、後の鶴見の議論の萌芽や関心の持続を指摘することも目的とする。

2. 「旧蔵書」の概要および後の著作との関連性

「旧蔵書」は、主に文庫、特にロシア文学の翻訳から構成されており、いわば「楽しみの読書」（マクヴェイ 2011: 32）のための書籍であると考えられる。例えばクロポトキンの『ロシア文学講話』の上下巻が含まれている。鶴見は70年代にアナキズムを論じるさいにクロポトキンを参照しており、また中学生の頃よりクロポトキンに親しんでいたというが（鶴見 [1997]2008: 47）、それはあくまでロシア文学の導きとして需要していたことがわかる。

また、西洋近代思想史に関する書籍も4冊ほど含まれており、それらには多くの下線ないし書き込みが見られる。特にベルグソンに大きな関心をもっており、概説書である『近代思想十六講』、専門書である『近代科学とベルグソン』のいずれにも多くの書き込みがみられる。特に、卒論で取り上げるW.ジェイムズの「経験」概念との比較を試みていたことがわかった。鶴見は80年代の漫画論においてベルグソンに言及しているが、その萌芽を「旧蔵書」から読み取ることができる。

鶴見は幼少期に抱いていた「問い」を後年しばしば再定式化しているが（鶴見 [1997]2008: 76-79）、「旧蔵書」の書き込みからは学生鶴見の「問い」を見出すことができる。鶴見の思想全体を記述する上でも、「旧蔵書」の分析は不可欠であるといえる。

【文献】

マクヴェイ山田久仁子、2011、「一冊の書きこみ本から」『図書』第748号、岩波書店、pp. 28-31。

鶴見俊輔、[1997]2008、『期待と回想』朝日文庫。

オルソン、L.、1997『アンビヴァレント・モダーンズ』（黒川創・北沢恒彦・中尾ハジメ訳）、新宿書房。